

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02786

研究課題名（和文）教育現場で地域の多職種連携を推進するための教員と学校支援に関する研究

研究課題名（英文）Research on teachers and school support to promote multidisciplinary collaboration in the community

研究代表者

泉 真由子（Izumi, Mayuko）

横浜国立大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00401620

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：学校教員が教育の専門家として、メンタルヘルス等の問題を抱える子どもの学校現場でみられる特徴的な言動、様子の見取りの観点・方略の獲得を支援することを目的に、学校で見られる子どものサインの具体的な表現（言動等）を、他職種が求める重要な情報と関連付けて再解釈し、「小学生用・中学生用気になる行動リスト」を作成した。小学校低学年では身の回りの不整備、中学年では学習場面への不参加、中学校では頻繁な遅刻・欠席、課題の未提出、人間関係のトラブル、特に女子生徒では不定愁訴（により保健室に頻繁に出入りする）等、子どもの発達段階により変化する学校現場でみられる問題行動の芽と考えられる諸特徴を抽出することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

SCとの協働により教員が語る「生徒の特徴的な言動や生活上の様子」の具体的な描写やエピソードについて適宜医療や福祉、あるいは特別支援教育の専門家が見立てを行う際に必要な情報や表現に変換することを試み、「小学生用・中学生用気になる行動リスト」を作成した。各ケースの背景や表出する課題は異なるが、学校教員や保護者が客観的に子供を捉え、関係する他者の声を聞くきっかけとして、アンケート調査への回答が起点となった。周囲の大人がそれぞれに見る生徒の姿を統合する作業を通して生徒の本来の困り感をより正確に推測することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to assist school teachers to be sensitive to the characteristic behaviors of children with mental health problems. To this end, a "List of Child Concerned Behaviors" was created by reinterpreting the characteristic signs of children seen at school in the language used by medical and welfare professionals. The elementary school students were characterized by their inability to organize their surroundings and participate in learning. Junior high school students were characterized by repeated tardiness and absences, relationship problems, and in girls, by indefinite complaints. Depending on the developmental stage of the children, the problematic behaviors observed at school were characterized differently.

研究分野：特別支援教育

キーワード：メンタルヘルス 多職種連携 学校現場

## 1. 研究開始当初の背景

これまで日本の学校現場では、児童生徒の抱える課題に対して学校の中だけで教師が中心となって対応してきた学校文化がある。しかし多様化する児童生徒課題に対して、文部科学省は教師のみの対応から学校と関係機関の協働を求める方針に転換した(「学校の『抱え込み』から開かれた『連携』へ 問題行動への新たな対応」文部省(1998)、「学校と関係機関との行動連携を一層推進するために」文部省(2004)、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」中央教育審議会(2015))。また昨今の学校現場において児童生徒に関わって生じる複雑多様な諸問題のなかで、発達障害に起因する二次障害を含むメンタルヘルスの問題が注目されており、特に地域における対応力の向上が求められている(全・廣畑・弓削・渡邊,2014; 神尾 2017)。

このような流れの中、優れた多職種間連携を実践する学校が報告され始めている(全ら,2014; 新村,2016)。しかし現状の多くは、普通教育も特別支援教育も、いまだ教師の個人的な力量と経験にたのむ形で、教育実践が展開しているというのが多くの現状であり、多職種連携・協働が根付いているとは言い難い。そこで、学校現場における多職種連携・協働を阻害する要因を、学校、医療、福祉それぞれの立場から検討した先行研究の知見より「多職種連携に対する学校教員の自信の欠如」と「職種間コミュニケーション不足」の大きく2つの要因が根底に存在すると考えられた。

まず「多職種連携に対する学校・教員の自信の欠如」については、学校教員は教育の専門家であり、特に子どもを集団の中で、人との相互作用の中で育成する、持てる力を伸ばす専門家である。しかし後述するようにいくつかの先行研究では、子どもの発達障害やメンタルヘルスの問題に対する学校教員の知識不足や感受性の欠如が指摘されている。複雑多様化した子どもたちの課題に対応するには多職種連携は必須であるが、一方で自身の(教育の)専門性のベースは確実に自信をもって保持しつつ、多職種の専門的知見からのアドバイスを適切に取り入れて、総合的にみてよりよい教育的支援を学校や教師自らが構築できることがこれからの学校現場には必要であると考えられる。つまり多職種からの意見等の言うなり、丸のみは、結局は教育の責任放棄に繋がってしまう危険性を認識しつつ、教育の専門家としての独自の子どもへの看取りの方略を獲得することが望まれると考える。

次に「職種間コミュニケーション不足」については、互いの専門性や価値観を十分に理解しないまま学校現場でなにか大きな事件が起こった時だけ性急に連携しようとするために、互いを「知識がない」「理解していない」と強く感じることになり、円滑な連携を阻害していると考えられた。またもう一つ、それぞれが高い専門性を持ち自身の本来のフィールドで多忙な業務に取り組んでいる者同士ということで、多職種連携のための時間をとることは本来の業務にプラスで行うサービスの要素が否めないという事実も連携がうまくいかない大きな要因である。しかし神尾(2017)は、発達障害のある子どもの心の健康問題に焦点をあて、これには教育と医療、福祉の連携が不可欠であるとし、それを本来の業務の中にしっかりと位置づけるべきであると主張している。特に学校現場においていかに予防的視点と早期発見早期対応の視点を持てるかが重要であり、そのためには平常時から多職種間ネットワークづくりを学校現場をフィールドとして各職種が協働して行うべきとしている(新村,2016; 青柳,2017)。

複雑多様化した子供たちやその家族の課題に対応するために、学校が他の職種からのアドバイスを受ける機会が増えているが、このような多職種からのアドバイスを鵜呑みにして学校や教員としての主体的な教育支援活動を制限してしまっている場面も少なからず見受けられる。教員自身の学校教育の専門家としての自信は確実に保持しつつ、他の職種の専門家からアドバイスを適切に取り入れて、総合的にみてより良い教育的支援を学校や教員自らが構築できることが、これからの学校教育には必要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、まず、学校教員が教育の専門家として、メンタルヘルス等の問題を抱えることもの学校現場でみられる特徴的な言動、様子の見取りの観点・方略の獲得を支援することを目的に、学校で見られる子どものサインの具体的な表現(言動等)を、医療や福祉の専門家が求める重要な情報と関連付けて再解釈する試みを行う。

また「学校現場に地域の多職種専門家が集い、学校現場を子どものメンタルヘルスを見守る・予防するプラットフォームとして機能させる」ことを目的に、医療(発達障害の専門医に加え学校医も)と福祉等の多職種が定期的に学校現場に向いて学校教員と共に事例検討会等を実施し、互いの専門性の理解を深め、学校を取り巻く地域の多職種間コミュニケーションの円滑化を

目指す。

### 3．研究の方法

**学校教員が教育の専門家として、メンタルヘルス等の問題を抱える子どもの学校現場でみられる特徴的な言動、様子の看取りの観点・方略の獲得を支援する。**

現在申請者が教育相談で関わっている横浜市立 A 小学校で子どもの多様な特性が主な原因で学級運営に困難が生じている 2~3 クラスについて、各担任が、1)子どもの強さと困難さアンケート (Strengths and Difficulties Questionnaire: SDQ, 以下「SDQ」とする) を用いて各児童について評価する。また児童生徒は、2)生活と健康アンケート(全ら,2014)を自ら回答する。また当該クラスに月 1 回程度、医療と福祉の専門家が参観し、3)授業中等の様子から「気になる児童」と具体的な様子を記録する。また学級担任は、4)学校生活の日常場面で児童の「気になる言動」を児童を特定したうえで具体的な言動の記録を一定期間蓄積する。1)の評定結果をもとに、支援の必要性の高さ (Total difficulties score) と 4 つの下位尺度得点 (行為面、多動・不注意、情緒面、仲間関係) の状態、2)生活習慣や心身の健康面の状態、3)専門家による評価と、4)児童が示し教員がキャッチした具体的な「気になる言動」の関係を検討する。そして何らかのメンタルヘルス等の問題を抱えるあるいは今後抱えるリスクの高い児童が、学校現場では比較的教師の目に留まりやすい特徴的な言動、様子をどのように示すのかを、教員の目線から明らかにする。またそれが、医療や福祉の専門家が児童の状態の見立てを行う際に必要な情報に変換されるパターンを明らかにする。

**学校現場に地域の多職種専門家が集い、学校現場を子どものメンタルヘルスを見守る・予防するプラットフォームとして機能させる。**

医療や福祉等の多職種が定期的に学校現場に出向いて、特定のクラスを参観してケース検討を実施する。医療、福祉、学校が、学校現場で起こる事例を同じ場で目撃し、それぞれの専門的立場から意見を交換を行うことで多面的な視点から検討し、学校としてよりよい支援策や指導方法を導く取り組みを行う。これにより互いの専門性の理解を深め、学校を取り巻く地域の多職種間コミュニケーションの円滑化を目指す。評価はフィールドとなった小学校において、多職種が関わる事例とそうでない事例との間で、特にどのケースにも共通して関わる教員 (管理職、特別支援教育コーディネーター、養護教諭等) を中心に事例にまつわるストレスや負担感、転機を迎えるまでの時間等についてアンケート調査によって多面的に比較検討する。また、医療の専門家としては発達障害等の専門医に加え学校医をメンバーとすることの評価は、本研究ではまずはこの取り組みの現実性を検討することを目的とし、学校医自身と学校管理職へのインタビューを行い、それぞれの立場からのメリット、デメリット、業務体制としての在り方を含めた今後の継続可能性を探るための課題の洗い出しを行う。

### 4．研究成果

本研究はコロナ感染症の影響により、当初の目的であった学校現場に多職種 (医療、福祉等) が集まり協働的な支援実践を行うことが実現できず、スクールカウンセラーとの協働が限界であった。

H 30

研究代表者が教育相談で関わっている A 小学校で子どもの多様な特性が主な原因で学級運営に困難が生じている低学年と中学年各 2 クラスについて、各担任が主観的に感じるメンタルヘル

ス等の問題を抱えるあるいは今後抱えるリスクの高い児童の学校現場での特徴的な言動、生活上の様子についてヒアリングを行った。その結果、低学年では例えば上履きや帽子を着用できない等の身の回りの整備に特徴がみられ、中学年では間違えること自体に対する拒否感が強く学習やグループ活動に参加しない等の学習場面での特徴的問題行動が共通して語られた。低学年、中学年に共通して見られたのは、過度に性的な言動、授業中の立ち歩き、だしぬけな発言、また主に秋以降に対人暴力傾向の高まりであった。これらの内容を含めた「気になる行動リスト」を作成した。

R 1

特別支援教育アドバイザーとして関りのある中学校の生徒指導会議において、特別支援教育コーディネーター、生徒指導専任、学年主任らを対象に上記と同内容のヒアリングを行った。その結果、中学生では頻繁な遅刻・欠席、学習の遅れ（課題等の未提出）、人間関係のトラブル（過度な攻撃性、孤立等）、特に女子生徒では不定愁訴（により保健室に頻繁に出入りする）がみられることが示唆された。小学生と比べて、教室の中で行われる特徴的な言動は減少するものの、教室外や担任教員の眼が届きにくい状況で発現する問題行動の予兆があることが明らかとなった。これらを含めた「中学生用気になる行動リスト」を作成した。

R 2

B 中学校で個別相談のあった3名の男子生徒とその保護者、担任教員に対して、子どもの強さと困難さアンケート（Strengths and Difficulties Questionnaire: SDQ, 以下「SDQ」とする）、生活と健康アンケート（全ら, 2014））、中学生用気になる行動リストを実施した。特に担任教員はスクールカウンセラーとの対話を通して客観的に生徒をとらえ直し評価するようにした。そして相互の結果を関連付けながら支援計画を作成し関係者間で共有した。その結果2名の生徒の学校不適応状態が改善した。

R 3

B 中学校で個別相談のあった男女1名ずつの生徒とその保護者、担任教員に対して、子どもの強さと困難さアンケート（Strengths and Difficulties Questionnaire: SDQ, 以下「SDQ」とする）、生活と健康アンケート（全ら, 2014））、中学生用気になる行動リストを実施した。担任教員はスクールカウンセラーとの対話を通して客観的に生徒をとらえ直し評価するようにした。そして相互の結果を関連付けながら支援計画を作成し関係者間で共有した。また学校長とともに保護者（両ケース共に母親）との面談を複数回行い、家庭と学校のそれぞれの大人がとらえる当該生徒の認識の差異に注目し、互いの認識を共有し相違も含めて認め合う作業を行った。その結果男子生徒の学校不適応状態が改善した。

R 4

最終年度は、これまで学校現場で実施した「中学生用気になる行動リスト」、子どもの強さと困難さアンケート（SDQ）、生活と健康アンケート（全ら, 2014）のデータと、対象生徒、教員、保護者の背景情報、さらに各ケースの経過と予後について質的に分析を行なった。各ケースの背景や表出する課題は異なるが、経過として保護者が客観的に子供を捉え他者の声を聞ききっかけとして、アンケート調査への回答が起点となった点は共通していた。アンケート調査に回答する過程で子供の様子を客観的に振り返ること、かつそのアンケートの回答内容をもとに学校関係者や専門職と対話をする糸口としても機能していた。一方で、子供自身の回答は客観性が乏しいケースもみられそれをもとに課題に焦点化した対話を始めることができるケースとできないケースがあった。本研究はコロナ感染症の影響により、当初の目的であった学校現場に多職種（医療、福祉等）が集まり協働的な支援実践を行うことが実現できず、スクールカウンセラーとの協働が限界であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 芳賀誠, 泉真由子	4. 巻 13 (1)
2. 論文標題 小学校における行動問題のある児童の担任に対する行動コンサルテーションの支援 - 校内の人的資源を活用した行動コンサルテーションの有効性に関する検討 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 棕田美穂, 高野陽介, 泉真由子	4. 巻 12
2. 論文標題 小学校低学年における継続した「ほめ」がもたらす効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 172 - 181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高野陽介, 五島脩, 泉真由子	4. 巻 12
2. 論文標題 肢体不自由の子どもをもつ保護者への質問紙調査による高校進学及び高校生活をサポートする上での困難・ニーズの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 291 - 300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 棕田美穂, 泉真由子	4. 巻 4
2. 論文標題 教師の「ほめ」により出現した子どもの心理的变化について バウムテストの結果から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要. 1, 教育科学	6. 最初と最後の頁 28-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 高野陽介, 泉真由子	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 肢体不自由生徒の高校進学・高校生活における困難さやニーズの検討 - 当事者団体に所属する肢体不自由者への質問紙調査から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 特殊教育研究	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉虫 麻衣子, 泉 真由子, 大内 美智子	4. 巻 11
2. 論文標題 子どもの具体的な姿をもとに語り合う授業研究～抽出児活用による教師の語りの変容～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育デザイン研究	6. 最初と最後の頁 208-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野 陽介, 本 純佳, 泉 真由子	4. 巻 11
2. 論文標題 高等学校に在籍する肢体不自由生徒の学校生活における支援の現状と課題についての検討 保護者へのインタビュー調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育デザイン	6. 最初と最後の頁 106-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木まさき, 脇本健弘, 野中陽一, 泉真由子, 柳澤尚利	4. 巻 19(5)
2. 論文標題 小中学校の若手教師の成長に関する縦断調査：初任期における困難（情報モラル教育の実践/一般）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉 真由子	4. 巻 第40巻4号
2. 論文標題 学校教育現場における多職種連携・協働の現状と課題 学校・医療・福祉に焦点をあてて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 299-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野陽介・泉真由子	4. 巻 2号
2. 論文標題 四肢麻痺のある生徒の水泳授業の実践 - 結果の平等から機会の平等への保健体育の転換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 64-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 梅澤秋久, 苜野一徳 (編著), 高野陽介, 泉真由子 (14章)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 真正の「共生体育」をつくる	

1. 著者名 山本昌邦, 島治伸, 滝川国芳, 小畑文也, 丹羽登, 泉真由子, 河合洋子, 副島賢和, 武田鉄郎, 谷口明子, 平賀健太郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ジーアス教育新社	5. 総ページ数 161
3. 書名 標準「病弱児の教育」テキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------